楊氏門

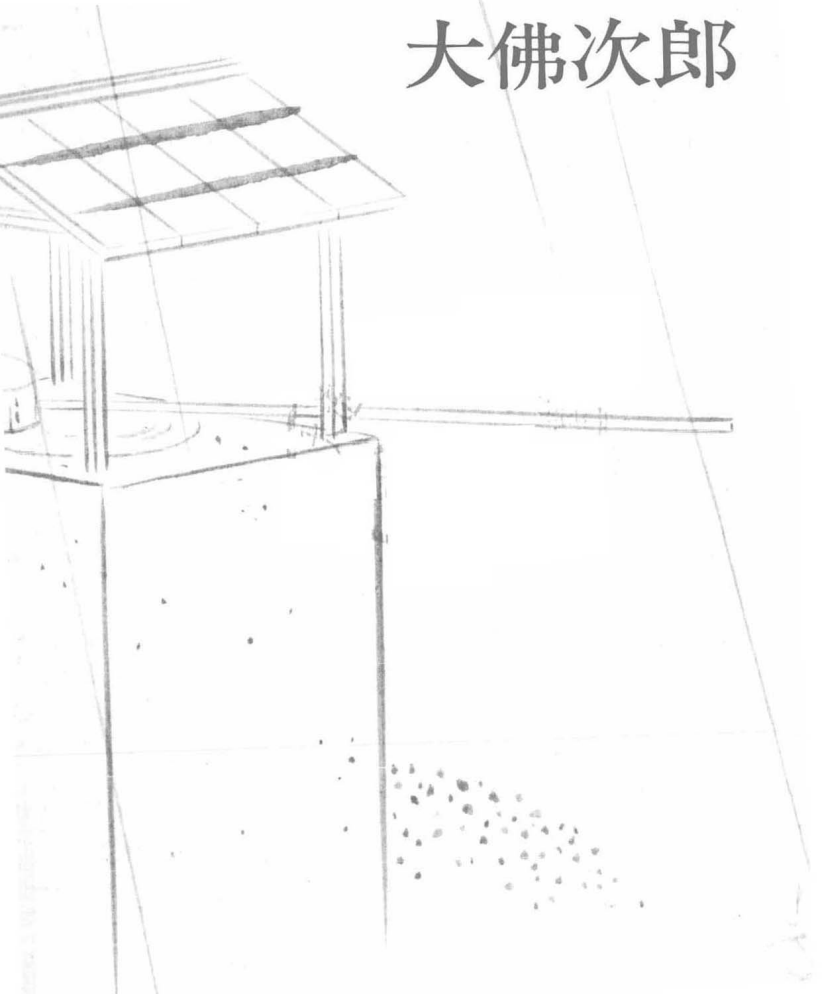
清國要人

大橋法郎

鞍馬天狗

面夜叉

大佛次郎



サンデー毎日選集

鞍馬天狗(一)
青面夜叉

定価 三八〇円

昭和四十四年九月二十日 印刷
昭和四十四年九月三十日 発行

著者 大佛次郎
発行者 星野慶栄
発行所 毎日新聞社
郵便番号一〇〇
東京都千代田区竹平町
三三〇
大阪市北区堂島上
八〇三
北九州市小倉区紺屋町
四三〇
名古屋市中村区堀内町

©大佛次郎 1969 印刷・中央精版 製本・佐久間製本

山の旦那……三
ささやき……二〇
襲　撃……三〇
夜の使者……五五
はにうの宿……七二
拝見の事……八一
闇中鬼語……九八
掛合話……一一五
朝の光……一二四
迷　路……一三三

あと一歩……一四一
追　跡……一五七
雲の行き方……一六六
昼の対話……一七四
対　決……一八二
猫の爪……一九一
隠れ家……二〇八
西国街道……二二四
須磨の巻……二四一

装本・挿絵　佐多芳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青面夜叉

山の旦那

一

雪の夜である。

京に悪い名物の、朝からしんしんと底冷えした日だったが、午さがりから降り出して、冬も松の青い東山三十六峰が寒々と白い姿と変って来ていた。

さほど大雪ではなく、昼の間は道路にも目立って積らなかった。往来が人の往来なくしんとしたのは日没後間もなくのことで、それから地面も人の足跡を稀れに、白い布を敷いたようになった。

雪は暗い宙に舞っている。

破れ傘をさした男がひとり、御所に近い道路を歩いていたが、すぐ目の前に人が立ったのに驚いて、はっとしながら警戒して見返した。

目と目が、突きあたるような具合で、出会った。お互が武士でないと、こういう仮借ない目を向けて見合うことがない。

破れ傘の男は、浪士風の武士で、衣服はやつれていたが、腰に大小を差していたのは無論である。

相手が視線を外したら、黙ったまま、通り抜けて行ったろう。

「何か用か?」

と、やや嚇しをきかせて、とがめるように言い立てた。それで、弁解があるか、黙って道をあけて通すだろうと期待したのは無論である。その辺、浪人して貧乏して、なりふり構っていられない人間の強味だ、と思っている。

金があったら、身分があったら、喧嘩は買わないのが定法である。

相手は、無言でうなずいて見せてから頭巾をかぶっていた首をめぐらして、

「長次」

と、誰れかを呼んで、

「提灯を持て」

この男一人ではなかったのである。男の陰になっていた路地の暗がりに隠れていたと見えて、誰れかぬっと出て来た。それが、一人や二人でなく、それぞれ士分の者ばかり、ばらばらと出て、浪人者を囲むようにして

「なんだ?」

と、逆に、権柄づくにとがめて掛った。

「お手前は、なんだ？」
「うむ」
と、一人の落ち着いた様子の男が、道路の前後を見あらためながら、
「静粛に」
と、命令した。
「あまり、声は立てぬように」
急に一変した境遇に、破れ傘の浪人者は、目をむいた。
「なんじゃ、これは？　お手前さま方は、なんじゃ」
「壬生じゃ」
と、はおった合羽の肩に雪を見せた一人の男が、歯を見せて笑って、ひくく言い放った。
「壬生の地蔵屋敷から、この雪の晩に、御苦労な」
その側から、別の者が、威嚇するように、けわしく名乗って聞かせた。
「新選組の者だ」
その間もチラチラする雪の中に、浪人者は凍ったような顔付に変って来ていた。月代が伸び、ささくれた髪も、ぼそぼそ髯にも、提灯の光を向けられて水玉が光った。
「さてじゃな。御浪士らしいが」
じろりと、見て、
「不審な点があったら、その辺まで御足労を願わねばならぬ。お名前は？」
「是枝七郎左衛門」
と、返事は素直になっていた。
「お国は？」
「因州です」
「都には、いつ頃から？」
「……」
「隠すとためにならぬ」
囲むように立った人間が、壁のように、進退の自由を許さぬものになっていた。
なお、冷たく降る雪の中である。
調べられる者の不安な心を知らず、武士たちは
「冷えるな」
と、朋輩につぶやいたり、短気らしく足踏みしたりしていたが、浪士の顔に時折向ける瞳は、一様にきびしかった。
「住居は相国寺門前の長屋？　偽りは言わぬだろうな？　さて、職もなく、なんで都に出ておるかじゃ」
「知りびとを頼って出てまいったが……その仁の居どころが、今に以て、相分りませぬので」
「それで、失礼だが、何をやって、暮らし向を立てて居られる？」

「実は……」
「実は？」
問い詰められて、浪人者は下を向いた。返事はない、苦しげであった。それを横合から、一人が嘲けり笑った調子で言葉を入れた。
「乞食でも始めなさるつもりか」
浪人者のゆがんだ顔に、目が光った。
「そ、それです。そう思います。是非もなければ」
「悪い料簡だ」
横合から、むごい言葉を入れた者が出た。
「それでなくとも、浮浪人は京に多くて、我々まで取締りに迷惑しておるのだ」

二

ようやく、放されて、歩き出すと、浪人者は雪道を歩き出したが、傘の下で無念そうに唇を噛んでいた。
「犬め！」
と、はっきりと、口走った。
相手から見えぬ距離まで遠ざかると、急に、片側の町家のひさしの陰にはいって、来た道を、足音を忍ばせて少しく戻った。

辻には、雪が舞っているだけで、人の影は見えない。これは次に誰れか通行人があるまで、往来から隠れて待つものと見えた。
「なんだろうな。よほどの大物を狙っているのでなければ、この雪の晩に。冷たい思いを承知で出て来る奴らでなかろうが……下知は、どこから出たのか？　守護職か、町奉行か？　それとも新選組の一存で、何か狙っているのか？」
道路に突き出した町家の格子窓が、身を隠すのに都合がよかった。
かなり永く、辛抱強く立っていたが、なんの変化も起らずに、ただ雪ばかりが町の夜を我物顔に降っている感じである。
自分に関係ないことを、並の人間ならば、いつまでも待っていられるものでない。果して、浪人者も倦きて来たらしく、強く舌打ちして、背にしていた壁から離れようとした。
しかし、ちょうど、その時、通りの同じ並びの数軒先に、まだ戸締りしてないらしく、障子越しの灯影が道路の雪に映っているのに気がついた。
静かな中に戸があく音がして、そこから人が出て来た。酒屋の店だったので、注文された徳利をさげて、小僧がど

こかへとどけるところである。
提灯の光が映って太い字で店の名を書いてある傘を明るくした。
見まもっているうちに、幻だったように辻近くまで行って消えた。
「酒か？」
と、浪人者は我れに復ったようにつぶやいた。
考えているらしく立っていたが歩き出したのが、灯影が道路に漏れている方角であった。
さる戸をあけて、酒屋の店の中にはいり込んだが、
「寒い、寒い」
と、真剣な声が出た。
「すまぬが、熱いのを一杯、飲ませてくれ。これでは宿に帰るまでに、途中で凍えてしまいそうだ」
「おいでやす」
と、意外に暖かい声で迎えられて嬉しかった。これは他にも客があって、奥の上がりがまちに腰かけて、湯呑の酒を、てのひらでかこって楽しんでいたせいで、断るわけにもいかなかったせいらしい。
それが、身なりは町家風で地味だったが、暗い外からはいって見て、目も醒めるように思うくらいにあでやかに見えた年増ざかりの女であった。
浪人者を見て、脇を向いていたが、こちらが柱を隔てて手前の店さきに腰をおろしたのを見ると、向きなおって、変に静かな見詰め方をした。
その目が笑っていたのだが、こちらは、それに気がついていなかった。

三

女は、しばらく黙って、膝もとに出してあった煙管を取上げて、一服しに掛っていたが、初めて決心したように、
「御苦労さまで御座いますね」
と、浪人者に話かけた。
こちらは、話かけられたのが自分と知って、驚いたように振り向いて、女の顔を見た。
「へ？」
女の顔は、灯影につやつやと濡れ、妖艶に笑っていた。
「覚えていらっしゃいません？」
「さて……」
まごついた様子が無骨で、
「拙者を存じておる？」
「心細いお話じゃ御座いませんか？」
と、恨むような目で、見まもっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「まあ、あいにくと、殿方に一々、覚えて頂けるような御面相には生れてまいりませんでしたが……」
「ふうむ」
あくまでも真面目なのであった。
「そうかね？　どこで、お目にかかったのかね」
「存じませぬ」
「人違いだ」
と、浪人者は言った。
「私ァ、一向に知らぬ」
「では、そういうことに致して置きましょう」
女は、澄した様子で、こう答えてから、
「番頭さん」
と、店の者を呼んで、目くばせして、浪人者に別の酒を自分のほうから出すようにした。その後を獣り込んでいたが、彼女は、ひとりで笑う理由を持っている様子であった。
浪人者が驚いたのは、次に、自分の名前を、はっきりと女が呼んだことだった。
「是枝さん」
「え！」
と、叫んで　目玉をむいて、
「どうして知っている？」
女は笑うだけで、女だてらの湯呑の酒を悠々と口に持って行った。
「な、なんで、わしを是枝七郎左衛門と知っている？」
「あ」
勝負にならぬ澄し方で、
「七郎左衛門さま……でしたか」
「……」
「そこまでは、覚えてませんでしたよ」
「おかしいな。どこで会った？」
「ですから、どっちでも宜しいんです。お初にお目にかかったことにして……」
「気になるのだ」
「そうでしょうって。だが、御油断で御座いましたね」
「どこの誰れだった」
「大方、その辺の野良猫で御座いましょう。恋に身をやつして、こちらの屋根から、あっちの屋根へ渡り歩いておりましてね。そんな時、女猫は、人にはめった、姿を見せないものなんです。忘れて下されば結構なんですよ」
「姐さん」
と、素直である。
「あやまるから、教えてくれ。どこで、いつ……？」
「女と何かだけには心を許すなって」
声を立てて、面白そうに笑った。

「御免くださいよ。だが、こちら様がこの辺にお姿をお見せになったところを見ると、やはり、山の旦那がこの御近所にお出ましなので御座いますね」
「山の旦那？」
「はい」
と、黒目を明るく、七郎左衛門の顔を見まもっていた。
「生身の人間では御座いません。お山の僧正ヶ谷とやらから、お出ましになった。こちら様が先生と呼んでいらしったお方ですよ。おや、まだ、わからない？　じれったいねえ。そう、白っぱくれて隠すことはない」
「何も、わしは隠しはせぬ」
「そんなら、なんで……からす天狗か、こっぱ天狗か存じ上げないが、この大雪の晩に、こんなところに、まごまごしておいでだ？」
「……」
「師の坊とやらの、お供で出て来たのでしょう？」
腹に沁みるようにうまかった酒の湯呑を、是枝七郎左衛門は、急に盆に戻した。
「おぬしが言うのは鞍馬天狗……先生のことか？」
「まだ、とぼけている」
女の顔は、急に、ひややかなものに変った。
「隠せると思うのかね？」
「知らぬ。わしは何も知らぬ」
首を振って見せながら、七郎左衛門の顔付は真剣な心持を見せていた。
「姐さん、わしは何も知らぬ」
「知らなけりゃあ、教えて上げようか？」
からかう目の色であった。
「なんで、お前さまが、こんなところに、この雪の晩に、うろうろしているかだね。いや、お前さまだけでなく、もう、ひとり居るんだよ」
「……」
「小さいから、木の葉天狗だろうね。だが、はっきりと、山の旦那のお弟子なのだ。もと街を角兵衛獅子をして歩いていた子供でね。名は、杉作っていうんでしょう」
「知っている」
と、七郎左衛門は、小さく叫んだ。
「あの角兵衛の子なら、わしも知っているとも」
「その子は、今、どこにいます？」
「知らぬ。そりゃあ知らぬ」
「そうですか？」
ひやかしたような笑い方である。
「御存じありませんか」
煙管をくわえて、じらすように悠々と煙草をのみに掛っ

たが、
「変な、当て物のような話だ。あの角兵衛の子はね、ここから二町と離れないところにある立木の上に、凍えそうになっていながら、枝につかまって、ぶるぶる震えているのさ」
「嘘だ！」
と、七郎左衛門は怒って叫んだ。
「そんなことがあるものか？」
「そう言って隠せると思うんですか？」
女は逆襲して来た。おだやかだが、皮肉な調子は露骨であった。
「なるほどね。お前さまは知らなかろうよ。だがね、その木の下まで、雪の上に小さい足跡がついていた」
「……」
「木をめぐって、どう登ろうか、と思案したらしい。足跡が根もとの雪を回っている。いじらしい話さ。おや、また来ているな、と私が気がついて、枝の上を見ると、可哀そうに見つけられると思ったんだろう。幹にしがみついて、小さくなって、下にいる私を見ないようにしている。雪が、しんしんと降っている中だろう。いつまで木の上に我慢出来るものか、と思ったから、默って、見逃して帰って来ましたのさ。だが、天狗さまのためとなると何を始めるか分らない子だ。まだ、この雪の中に辛抱しているような気がするねえ。ほんとうに、可哀想だがねえ」

四

浪人、是枝七郎左衛門は、だんだんと落ち着かない様子になった。手を控えていた大湯呑を取って、ぐいと酒をあおり続けながら、話を聞いていたのだが、急に、むせて、顔をゆがめて、激しく、せき込んだ。
「姐さん」
と、朴訥に膝を直して、
「そりゃあ、出まかせの話でなく、ほんとうなのか」
女は、七郎左衛門の髯面を見返しているだけで、無言になっていた。
「姐さん、あの角兵衛の子供が……だが、なんで、今時分、そんな立木の上に登っているだろう」
「これは驚きましたね」
と、女は、まだ七郎左衛門から目だけは放さずにいたが語気は変った。
「ほんとうに、お前さまは、何も知らなかったのかしら？」
「知りませんよ。私は、ここのところ、鞍馬天狗先生に久しくお目にかかっていない。京においでだとも知らずにい

たのだ」
「……」
「わしは、このとおり田舎生れの無骨者で、決して、嘘はつきませぬ。誠心誠意、話しておるのです。鞍馬天狗先生は、一度、深い御恩になった。なんとも申し上げようのない方だと、ただ敬服して、出来ることなら、いつまでもお側に付いていたいと望んだのだが、別れて以来、先生は私には苦労して探しても、つかまらぬ方となった。御覧のとおり貧乏しておって、生甲斐らしいものを知らずに来た人間に、先生だけが、生きていてこの世が驚くべきものなのを教えて下さった」
「……」
「今でも、お目にかかりたいのです。衷心から、そう願っておるのだ。姐さん、あんたが何か承知しておられるなら、教えて頂きたい。それにしても角兵衛獅子の杉作が、夜の今時分、木の上にいるとは、どういうことなのですか？」
「驚きましたね」
と、女は急に溜息して苦笑した。
「これゃあ、私の敗でした。お前さまの顔を見たばかりに、ひとり合点で、相撲を取ってしまったらしいんだね」
「……」
「とんでもないことだ」
「いや、姐さん……」
七郎左衛門の顔には、真実が現われていた。
「教えて下さい」
「そりゃあ、やめておきましょうよ。出て行ってお前さまが、怪我をするか、もっと悪くしたら二つとない命をなくしに行くもの。そうと知ってて、教えて上げられますか」
「姐さん」
きっと、形が改まった。両眼が、鋭く光った。
「では、この先の辻に、雪の中に壬生の連中が、手ぐすねひいて待伏せている相手は……鞍馬天狗先生なのか？」
「そうでないとは言いますまい」
と、妖しい女は、答えた。
「また、この先の辻だけに人が出ているとも言いますまいよ」
「……」
「出口という出口にあたる辻、近所のお寺の境内。それから二条の橋のあたり。度々驚りているからだろうが、今度は、よくも手配したもの、と、あたしが感心して見て来たんだから」
「姐さん、そりゃあ……」
「だから、いけない。落ち着いてくださいよ。さがしても会えないようなひとに、命まで投出して義理を立てること

もありますまいに。また、そうならそうで」
女の言葉は急に途中で切れた。
死んだように静かだった家の外に、何やら、人の叫び声らしいのを聞いたように思ったからであった。
「姐さん」
と、七郎左衛門は、上がりがまちに置いた大刀をつかんで、立ち上がっていた。
「忝けなかった。これで御免蒙る」
「いけない」
と、女は叫んだ。

五

杉作は、雪の降る中に木の枝の上にいる。
その木は古い杉の木だった。往来に太い根を張って、一列に五株ほどある中の一本で、幹が細いほうだから、抱きついて両腕を回して登ることが出来た。
枝の上にいると遠見が利く。杉作が注意して見ているのは、下の道路と、自分が足場にしている枝の下に伸びた長い築地の内部にあたる大きな屋敷である。
道路のほうは、ふんぷんと雪が渦を巻いているだけで、かなり永く人が通らず、地面は真っ白であった。
ずっと前に、蛇の目傘をさした女が歩いて来て、そのまま通り過ぎて行くのかと思ったら、どうしたものか、その辺で立ち止まったり、人でも待っているようにゆっくりとあたりを歩いて、一度は杉作のいる木の下まで来て、傘をかしげて上を見上げた。見つかったのかと思って、ぎょっとしたことである。夜のことだし、降っていては雪あかりだって、人を形だけ影のようにぼんやりと見せるだけであった。その上に傘の陰になって、見ようとしても顔は見えなかったろう。ほんとうは見つけられそうでこわくて、杉作は落ちないように幹にしがみついたまま、下を見なかったのだ。
雪道を踏む足駄の音にきがつき、のぞいて見ると、女が遠ざかって行くところであった。
どこの誰れか知らない。
だが、誰れだって通って行ってしまってくれれば、今の杉作は、まあ、よかったと思い、ほっとして忘れて、その次のことを考える。
胸が、どきどきするほど、気ぜわしないのだ。
杉作は、この大きなお屋敷の中に、鞍馬天狗先生が来ているのを知っている。ひそかに駕籠で来て、玄関にはいったのだ。
杉作は、それとなく、鞍馬天狗の駕籠のあとを尾けて来

たのであった。無事と見て、帰ろうとして、一町ばかり離れた辻まで行くと、新選組らしい武士がかたまっていた。何かを待伏せているように、隠れたまま動こうとしない。

新選組と、はっきり見極めたわけではなかったが、この雪の晩に、ただ事ではないと気がついていた。こうして大の武士たちばかり、京の市中で集まっているとしたら、警備の見回り組か新選組と見るよりほかはなかった。

「先生の帰りを狙っているんだ」

こんな子供でも、経験から、こう教えられた。

それならば、誰れのか知らないが、このお屋敷の中にはいって行って、鞍馬天狗に、そのことを知らせればよい。それをしないで、外にうろうろしてから木に登って、塀の中をのぞいて見た。そこが、子供なのであった。

町の子供には、いかめしく大きな屋敷ほど、はいりにくい。いろいろの人間がいて叱られそうな気がするのだし、話して取次いで貰えそうもないと思っている。

鞍馬天狗が帰ろうとして出て来るのを待つ気であった。屋敷の屋根は、雪の降る中に真っ白であった。大きな、大きな屋敷である。そして、その他は、庭もどこもやはり雪が積っているだけで暗い。灯影が小さい窓に赤く映っているだけで、どこも雨戸を閉めて暗いのである。

どこに鞍馬天狗の先生がいるのか、木の上からは見えなかった。

風はないが、冷たい。

「早く、出て来てくれるといいんだがなあ。おら、つめてえや」

考えるだけでなく、声にまで出して見ないと、寒くて我慢出来ない。枝につかまっている両手を、片方ずつ、口に運んで来て、息をかけて暖めるのであった。

「帰ろうか？　寒いや。なんとか先生に変な奴がいるって、知らせられないものかなあ。遅いや。何してるんだか」

六

屋敷の主に、鞍馬天狗は、初めての面会ではなかった。しかし、こちらは一介の浪士、先方は、東白河の三位と言えば、現在は表面に立っていないが、五摂家の流れで、多勢いる中で一度や二度、同席したところで、自分のことなどを記憶しているはずがないと思っていたのに、人を介して、一度茶でも進ぜよう、屋形へ尋ねて欲しいと話があって、承諾すると、今夜を指定して来た。

志士の間では、

「東白河卿は、頼みになるぞ」

と、人気があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com